

主題	外出して帰って来られない利用者への取り組み
副題	笑顔でいってらっしゃいと言える支援

高齢者の見守り	高齢者の迷子	研究期間	2年4か月
---------	--------	------	-------

事業所	東京蒼生会 養護老人ホーム 大森老人ホーム
-----	-----------------------

発表者： 柳葉志穂 ・ 小林恵	アドバイザー：
-----------------	---------

共同研究者：伊藤邦明・長瀬敦史・村岡蘭

電話	03-3762-8851	E-mail	oomori_sien2kai@dolphin.ocn.ne.jp
FAX	03-3762-8920	URL	http://www.t-souseikai.or.jp/oota1/index.html

今回発表の事業所やサービスの紹介	平成9年に開設した定員130名の全室個室の養護老人ホーム。デイサービスセンター・区立体育館・児童館・都営住宅・区営住宅・シルバーピアがある複合施設の1階から4階までが施設となっている。自立型の施設であるが、利用者の高齢化に伴い介護を必要とする方が増加している。平均年齢81.6歳、全体の約3割が要介護認定を受けており、そのうち27名が介護サービスを利用している。(平成25年度時点)
------------------	---

《1. 研究前の状況と課題》

利用者Aさん・75歳男性。ADLは自立しているが統合失調症があり、“常同運動”と呼ばれる目的のない歩行が顕著にみられる。

障害高齢者の日常生活自立度：A1

【状況】

入所当初のAさんは自由に外出していたが、徐々に認知機能の低下がみられ、外出先から帰って来られないことが増えてきていた。そんなある日、外出したAさんが行方不明となり、翌日負傷して発見する出来事が起こってしまった。

【課題】

そのような状況があり、Aさんに外出を続けてもらうべきか、それとも安全を考慮し止めるべきか、職員間での検討を重ね、本人らしい生活を送れるよう安全に外出を見守ることのできる体制づくりが課題となった。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

【目標】

安全な外出が継続でき、落ち着いた生活が送れること。

【期待する成果・目的】

- ・本人の気分転換や精神の安定に繋げる。
- ・日常生活自立度の向上に繋げる。
- ・外出範囲を把握し、安心安全に外出を見守ることができる。
- ・職員間での検討や周知を繰り返すことで、より質の高い統一した支援が行える。

《3. 具体的な取り組みの内容》

本研究では以下のような取り組みを行った。

① 人感センサー・GPS・身分証の携帯

これらを常時携帯してもらうことは、人権問題に触れるのではないかと懸念されるが、今回はAさんの外出を支援することを第一とした。

・玄関付近の通過を感知する人感センサーは、スタッフルームをはじめ1階事務所や守衛室へ音で知らされ、外出する姿や帰った姿を全てのセクションで確認。

・外出15分経過後にインターネットにつなぎ所在の検索し確認。

・身分証には、氏名と施設連絡先を記載。

② 外出時間の見直し

早朝や夕方では近隣の道路で自転車の通行量が多いため、落ち着いた時間帯8:30~15:30を外出の可能時間として設定。

③ シルバー人材の活用

週3回、外出に同行してくれる地域サービスを利用。

④ 地域行事への参加

地域住民にAさんの存在を知ってもらうため、毎年大森老人ホームが outlet している区民祭りの模擬店で、Aさんを主とした“じゃんけん大会”を開催。

《4. 取り組みの結果と考察》

人感センサーやGPSの活用により、Aさんの外出時の所在が把握できるようになった。外出のコースは大抵駅周辺であり、その片道は約15分かかることも徐々に分かってきた。時折コースを外れることもあるが、15分おきに所在を検索することで道に迷う可能性を防いでいる。しかし、GPSの情報をもとに搜索しても、正確な位置まで絞り込むことは困難で、簡単に見つけられないのが現状である。

認知機能の低下により、季節感や自身での体調留意が難しいAさんに対し、職員の声掛けが増えたことで受け応えもスムーズになり表情も穏やかになった。“遅発性ジスキネジア”という舌を出す仕草がよく見られたが、現在はあまり目立たなくなっている。一人での散歩は危険として止めていた夕方の外出も、シルバー人材の利用により可能となった。

大森老人ホームでは、食事をしながら交流を図る“ホームでランチ”や“クラブ活動”なども行っている。地域行事の参加により、Aさんのことを“老人ホームの人だ”と知ってもらう機会に繋がった。日頃の活動や行事でボランティアの協力を得るなど、職員だけでなく地域住民も含めて利用者支援に努めている。普段から地域との関わりがあるからこそ、今回の取り組みにも前向きに

取り組めたと考えられる。

《5. まとめ、結論》

人感センサーやGPSの活用、シルバー人材の協力があり、Aさんは気兼ねなく、職員も安心して外出を見守れるようになった。しかし、今後Aさんのような利用者が増加した場合、本人らしい生活としてどこまで支援していくべきなのか課題も残る。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

本研究発表を行うにあたり、ご本人・後見人に口頭にて確認をし、本研究発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

- ・全国社会福祉法人経営者協議会『養護老人ホームの現状と今後のあり方～機能強化型養護老人ホームの提案～』平成25年9月

《8. 提案と発信》

外出しても帰って来られない利用者の外出を認めるか否か、それは施設にとどまらず地域全体で高齢者を見守る支援に繋がるのではないだろうか。危険だから外出を止めるという一般的な考えではなく、どうしたら本人の生活リズムを崩さずに安心安全な外出を見守ることができるのか、様々な資源を活用するハード面と、職員や地域住民、皆で協力しあうソフト面の両者が合わさって初めて出来る支援であり今後の課題でもある。

また、施設のことだけでなく積極的に地域へも目を向け、在宅で暮らす高齢者の現状を把握し、出来る支援に繋げていくことも今後施設に求められているのではないだろうか。

【メモ欄】